

# 人にも環境にもやさしい社会づくり ドイツ

## 最新型路面電車が走る街



この夏、ドイツを旅してきました。そこで見て、感じて、考えたことを紹介します。

ドイツでは街中で車いすの人やベビーカーを押す人をよく見かけます。ごく普通に路面電車に乗り降りしながらショッピングや散策を楽しんでいます。ドイツでは世界で最も多い57都市で路面電車（といっても最新型の超低床車（LRT）がほとんど）が走り、市中心部はたいがいトランジットモール（車を閉め出した商店街）になっています。路面電車や電車、バスに乗って郊外から人が集まり、どこの街も様々な人で賑わっています。もちろんドイツも、ベンツ、BMW、フォルクスワーゲン、アウディといった自動車メーカーがひしめく車社会ですから、鉄道や路面電車、バスなどの公共交通機関は経済性に欠けます。しかし人々の交通権と環境を保護するために国と自治体の責任で公共交通ネットワークづくりを推進してきたのです。水戸市規模の地方都市でも、車だけに依存しないでも生活可能な街づくりが進んでいます。

## 鹿島鉄道の廃線

茨城県でも地方鉄道の廃線が相次ぎました。2年前の日立電鉄線、今年3月の鹿島鉄道、そして廃線か存続かの瀬戸際に追い込まれた茨城交通湊線。過度な車依存推進政策（道路建設）の中で、乗客減が続き会社としての経営が成り立たなくなり、交通手段の選択肢がどんどん少なくなっています。これと同時に市街地の空洞化も進みました。同じ車社会であってもドイツとはまったく逆の方向に進んできました。さすがにこのままでは地方の公共交通が壊滅し、都市部との生活格差がますます拡大すると危機感を持った政府の一部から、「地域交通を活性化するため」の政策が打ち出されました。路面電車や地方鉄道、バスを行政と地域と事業者の連携で維持しようとするものです。年間80万人の利用者を見込む（もちろん過大予測）「茨城空港」事業に510億円（県は340億）を注ぎ込む一方で、同じように年間80万人が利用していた鹿島鉄道を、県は1億円の出し渋りで見殺しにしてみました。全国規模の交通ネットワーク整備が進む中で、足下の地域公共交通は衰退の一途です。

今こそ、日本でもそしてこの茨城県でも道路づくりを見直して、「人と環境にやさしい」公共交通ネットワークづくりを進める時です。

## 自販機もコンビニもない



ドイツでは日本のように街中では派手な看板をみかけませんし、歴史的な街並みを保存することに熱心ですから、街が落ち着いた感じでとても綺麗です。その上、街中には、自販機もコンビニもないのです。コンビニがない理由は、長時間で不規則な労働が国内に広がらないようにするため、つまり労働者の健康で文化的な生活を守るために規制されているからです。コンビニはアメリカ流の消費文化の象徴。あつという間に広がった日本では、非正規労働の増加や環境の悪化が同時に進行しました。

また、自販機もコンビニも電気を多量に浪費する地球温暖化のシンボリック的存在です。ドイツでは飲み物の容器として缶はあまりみかけず、瓶やペットボトルが中心です。これは国全体で実施されているデポジット制（預り金制）のため、缶も瓶もペットボトルも1つ約50円の預り金をとるために、缶が敬遠されたからです。生活や環境を守るためには、手間やコストをかけ我慢もする人がたくさんいるドイツだから、環境先進国なのでしょう。

## 自転車が駅のホームを走る



ホームを走る自転車には面食らいましたが、慣れてしまえば何も気になりません。駅に改札口がなく、自転車を積める車両がありしかも持ち込みが無料だから、ホームを走れるわけです。街中でも自転車がたくさん走っています。車道と歩道の上に自転車専用レーンがあるので、安心して自転車も人も行き来できるようです。日本でも高校生や中高年女性の自転車はよく見かけますが、ドイツでは年代も男女も関係なく自転車が使われています。また田舎道でもよく自転車を見かけましたから、日常生活の足としてに定着しているようです。もちろん、車もたくさん走っているドイツです。

ドイツと日本は第二次世界大戦の敗戦国として、焼け跡から蘇った先進国としての共通点を持っています。しかし、ドイツは環境問題と近隣諸国との戦争責任の問題では先進的な取り組みをしてきました。二酸化炭素の排出量を着実に減らしていますし、EU（ヨーロッパ連合）を戦争が起きないように国を超えた組織として育ててきました。

人と環境にやさしい「公共交通ネットワーク」づくりをドイツに学びたいものです。